

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏 名 辻 照彦
学 位 博 士 (文学)
学 位 記 番 号 新大博 (文) 第 9 号
学 位 授 与 の 日 付 平成 2 6 年 3 月 2 4 日
学 位 授 与 の 要 件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
博 士 論 文 名 『ハムレット』のテキストにおけるパッセージの異同に関する研究

論 文 審 査 委 員 主 査 教 授 佐々木 充
副 査 教 授 高木 裕
副 査 准 教 授 岡村 仁一
副 査 新 潟 国 際 情 報 大 学 特 任 教 授 高 橋 正 平

博士論文の要旨

シェイクスピアの『ハムレット』には、1603年に出版された The First Quarto (Q1)、1604年に出版された The Second Quarto (Q2)、1623年に出版された The First Folio (F)という3種類のバージョンが存在し、そのテキスト間の異同の性格について様々な意見が提出されている。本論文では、Q2とFの間に見られる異同について、先行研究を整理・批判するとともに、異同するパッセージを詳細に比較分析し、異同の特徴や発生のメカニズムを明らかにし、その結果に基づいて、パッセージの異同に関連して主張されてきたFをQ2のシェイクスピア自身による改訂版と見なす作者改訂説を批判し、『ハムレット』のテキストに関する現在の学会の趨勢に対して修正を加えようとするものである。構成は以下の通りである。

序 論

第1章 3幕4場の the ‘engineer’ passage

第2章 4幕4場の Q2-only passage と独白

第3章 5幕2場の Q2-only passage

第4章 2幕2場の ‘Denmark’ s a prison’ passage

第5章 2幕2場の the ‘little eyases’ passage

第6章 5幕2場の ‘The interim’ s mine’ passage

第7章 残されたパッセージレベルの異同と作者改訂説

結 論

第1章では3幕4場のいわゆる Q2-only passage である the ‘engineer’ passage について論じ

ている。この一節の中で、イングランドに送られることになったハムレットは、ローゼンクランツとギルデンスターンがイングランドに同行することに加えて、彼らがイングランド王に宛てた親書を携行することをガートルードに語り、学友二人に対する警戒心と対抗策を講じる決意を表明している。Philip Edwards や Grace Ioppolo に代表される研究者は、ハムレットがこれらの情報を知った経緯がテキスト上で説明されていないことや、この台詞の内容が神の摂理によって親書の書き換えに成功したとする 5 幕 2 場のハムレット自身の説明と矛盾することを指摘して、齟齬に気付いたシェイクスピアがこのパッセージを削除したと主張する。それに対し筆者は、Saxo Grammaticus や Belleforest による原話と比較つつ、テキストの綿密な読解に基づき、ハムレットの表明に矛盾がないことを明らかにし、また、ハムレットを殺害するためのイングランド計画に関する情報が Q2 や F では提供されておらず、‘engineer’ passage は親書書き換えのエピソードを成立させるために不可欠な情報をコンパクトな形で観客に提供するという、ドラマツルギー上の機能を果たしていることを明らかにしている。

第 2 章は現在も上演の際にカットされることが多く、一部の研究者がシェイクスピア自身によって削除されたと主張している 4 幕 4 場の Q2-only passage について論じている。筆者は、4 幕 4 場が劇全体の中で果たしている 3 つの機能に注目する。まず、4 幕 4 場が、劇の最終シーンに備えて、有能な指揮官としてのフォーティンブラスを描くと同時に、ハムレットがその雄姿を見て感動した事実を観客に伝える機会となっていること、続いて、ハムレットが母親の前で復讐の決意を表明する原話のクロゼット・シーンと、復讐への直接的言及が控えられている『ハムレット』のクロゼット・シーンを比較しながら、4 幕 4 場の Q2-only passage に含まれる独白は、ハムレットが出国前に復讐の決意を観客に向かって表明する機会となっていることを明らかにしている。さらに、Q1 では、4 幕 5 場に当たるシーンの冒頭に、王と妃がハムレットの出国について語る台詞が追加され、観客がハムレットの出国について確認する機会が別の形で提供されていることを示し、4 幕 4 場の Q2-only passage は、ハムレットがクローディアスの命令通りにイングランドに向けてデンマークから出発したことを観客が最終確認する機会を提供し、4 幕 5 場のサスペンスをより高める機能を果たしていることを論じている。原話や Q1 との比較、演劇的機能の分析によって筆者はこのパッセージの必要性を論じ、作者削除説を否定している。

第 3 章では、5 幕 2 場の 2 つの Q2-only passage のうち、レアティーズとのフェンシング・マッチについて再確認するためにやって来る無名の^{ロード}貴族のスピーチを中心に論じている。ロード・スピーチは、オズリックの話を繰り返すだけの無駄なスピーチだとして、F からカットされていることを支持する批評家が多いが、筆者はまず、5 幕 2 場のオズリック・エピソードからフェンシング・マッチの開始までを試合に関する情報の伝達という視点から分析し、ロード・スピーチは、それまで未決定の状態が続いてきた試合の時間と場所について登場人物と観客に最終確認させる機能を果たしていることを明らかにしている。続いて、ハムレットが死の予感である胸の痛みを訴えるところまでの演劇的流れを分析し、ロード・スピーチはオーギュリ（予感）・スピーチへの重要な布石になっていることを明らかにしている。さらに、オズリックに相当する Q1 の Gentleman の台詞を分析し、F と同様にロード・スピーチがカットされていると言われる Q1 では、フェンシング・マッチの時間と場所を明確にするために、ロード・スピーチの表現の一部が Gentleman の台詞に移植されている可能性が高いことを論じている。

第 4 章では、一部の研究者によって、シェイクスピア自身によって F に加筆されたものと考えられている 2 幕 2 場の F-only passage である ‘Denmark’s a prison’ passage について論じてい

る。筆者は、この **F-only passage** が **Q2** からカットされたことを示す痕跡としてこれまで論じられてきた **'but'** で始まる文章が連続する問題を、文法的観点から削除の証拠として有効であると判断し、2 番目の **'but'** の大文字化の問題を当時の正書法から検討して **'but'** の大文字化については変則的とは言えないという結論を下している。さらに、**F-only passage** とその前後の **Q2/F** 共通テキストの間には、**Fortune** や **beggar** に関するトピックが連続していることや、単語やフレーズのレベルの「エコー」が見られることを示しながら、**'Denmark's a prison' passage** は **Q2** の基になったマニュスクリプトに最初から含まれていた可能性が高いと結論付けている。

第 5 章では、2 幕 2 場の **F-only passage** である当時のシティーにおける少年劇団への言及が見られるパッセージであり、作者改訂説論者によって **F** への付加だと主張されているパッセージについて論じている。筆者は、劇場戦争に言及している **the 'little eyases' passage** とその直後のハムレットのコメントを分析して、少年劇団と成人劇団に対してハムレットが新王クロードィアスと先王ハムレットを対応させているのは、劇場世界とデンマーク王国に共通する価値観の混乱を強調するためであることを示しながら、少年劇団への言及が消失してしまう **Q2** では、そのパラレル関係が成立しなくなること、**the 'little eyases' passage** とその直後のハムレットのコメントに見られる表現上のエコーを指摘しながら、このパッセージが **F** への加筆ではなく、**Q2** からの欠落である可能性が高いことを論じている。

第 6 章では、5 幕 2 場の **F-only passage** である **'The interim's mine' passage** について論じている。これは、イングランドに向かう船上で親書を書き換えた顛末をホレイショーに説明した後、ハムレットがクロードィアスに対する復讐の決意を再表明するパッセージであるが、作者改訂説論者によってシェイクスピアによる **F** への加筆だと主張されているものである。筆者は、**Q2** のハムレットの台詞は冒頭及び末尾の文章が完結しておらず、文法上不定詞表現が続くことを期待させる表現になっていることや、このパッセージとその直前の **Q2/F** 共通部分に跨って対句表現が形成されているという文章表現上の理由から、**'The interim's mine' passage** の最初の部分とその直前の **Q2/F** 共通部分には緊密な連続性が存在することを明らかにするとともに、このパッセージに見られる、ハムレットに復讐のために残された時間が少ないことを警告するホレイショーの台詞が、直前の **Q2/F** 共通部分にあるホレイショーの台詞と有機的に関連していることや、レアティーズと格闘したことを後悔するハムレットの台詞が、ハムレットによるフェンシング・マッチ受け入れのための伏線となっていることを示しながら、この **passage** が **F** への加筆ではなく、最初から **Q2** の基になったマニュスクリプトに存在していた可能性が高いことを論じている。

第 7 章では、**F** と **Q2** では、レアティーズの描き方が異なっているとする **Paul Werstine** の主張について検証している。まず、クロードィアスとレアティーズの密談シーンである 4 幕 7 場の **Q2-only passage** に関連して、**F** のレアティーズは **Q2** のレアティーズと異なった形で描かれているとする **Werstine** の説について、**Q1** や『ハムレット』のアダプテーションである *Der Bestrafte Brudermord* の展開と比較しながら、**Q2** と **F** のいずれも、レアティーズはより積極的にハムレット殺害計画に関与しているように描かれており、**F** と **Q2** で、レアティーズの描き方に差が認められないことを論じている。続いて、5 幕 2 場で学友二人がイングランドで処刑されることをホレイショーから確認された時のハムレットの反応が **Q2** と **F** で異なるという **Kerrigan** の主張について、**Kerrigan** の解釈の問題点を指摘しながら、劇中に描かれて

いるハムレットと学友の関係は、Kerrigan が主張するほど Q2 と F で異なっていないことを論じている。

結論の章では、(1)『ハムレット』のテキストに見られる 3 つの F-only passage はすべて、F への加筆ではなく、Q2 の基になったマニュスクリプトにもともと存在していたものであること、(2)『ハムレット』の Q2-only passage は実際の上演時にカットされていた可能性が高いが、第 1 章から第 3 章までで扱った 3 つの Q2-only passage のように重要な情報を含む場合には、上演時にその情報を補填するアレンジが施されていたとみなされること、(3)『ハムレット』の F バージョンを Q2 バージョンのシェイクスピア自身による改訂版と見なす作者改訂説の主張は、各章で論証されているように、F-only passage はシェイクスピアの草稿に最初から含まれていたと考えられるものであるという理由から、その成立基盤を失うことを結論として示している。

審査結果の要旨

現在、シェイクスピアの『ハムレット』のテキストを作成しようとする場合、作者の草稿に基づいているとみなされる Second Quarto(Q2)と、劇団に残された台本を元にしたとみなされる Folio(F)を主とし、役者の上演時の記憶によるものと見られる Q1 を参考にして作成される。しかしながら、ほぼ同一の長さのテキストである Q2 と F のテキストにおける相互の異同の性格については、評者の意見が分かれ、いまだに定説は存在していない。

本論文は、このような『ハムレット』のテキスト相互の異同について、Q2 と F で相違するパッセージを取り上げ、数多くの先行研究に対する詳細な整理と批判を行い、様々な角度と視点からの分析を総合し、個々のテキスト相互の異同の性質について、間然するところの無い綿密な考察を行っている。その中で、筆者のシェイクスピアの各版本の性格やその相互関係に対する造詣の深さ、当時の正書法やシェイクスピアの文法・語法についての筆者の知識の正確さを示している。筆者の『ハムレット』版本の分析による本論文の主意は、Q2 にしかなく F から欠落している Q2-only passage は F に含まれるべき部分が脱落したものであり、Q2 に無く、F にしかない F-only passage はシェイクスピアの草稿に最初から含まれていた一節が Q2 から脱落したとするものである。また、この論証結果に基づき、F にしかない F-only passage をシェイクスピアによる改定とする作者改訂説を否定するものである。この主張は、Q1、Q2、F のそれぞれのテキストの独自性を認めようとする現在の学会の傾向を修正するものとして評価できる物である。

本論文は様々な説が飛び交うシェイクスピア・テキスト批評に対し、綿密で精緻な論証によって穏当かつ公正な判断を下したものであり、『ハムレット』テキスト作成の基礎となる見解を提供したものとして評価できるものである。今後、『ハムレット』のテキストを作成する場合、この論文の成果を無視してそれを行うことは不可能であろうと考えられる。

なお、この論文は、『ハムレット』のテキスト批判という文学に特化した論文であるところから、博士（文学）を授与するにふさわしいものである。

以上のことから、本審査委員会は本論文に対し、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。